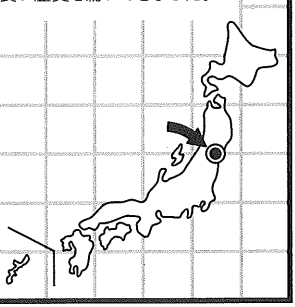
シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて

地域に支えられ、地域に根ざした、歴史の長い幼稚園

学校法人曽根学園　東二番丁幼稚園

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第12回は仙台市青葉区にある学校法人曽根学園　東二番丁幼稚園です。6月に開園134周年を祝った伝統園は、地域に支えられ、長い歴史を紡いできました。



仙台駅に降り立った途端、駅のコンコースの飾りからも、七夕祭りが近いことが感じられる。町の中心地を歩いて園へと向かう。アーケード街の天井は高く、八月の華やかな七夕飾りを思い浮かべながら歩く。「そろそろ園に近づいているはず……」と辺りを見回すが、ブランドショップの看板が次々と目に飛び込んでくるばかり。けやき並木の大通りを曲がると、園長先生が、登園する親子と朝のあいさつを交わしながら、さわやかな笑顔で私たちを迎えてくださる。

幼児教育の灯を仙台にともし続ける

「子どもたちの朝は、どんなふうに始まっているのかしら」と気がはやるものの、まずは園長室で加藤正範園長、齋藤千恵子副園長からお話を伺う。

東二番丁幼稚園は、平成二十一年度までは公立幼稚園だった。平成十八年度、仙台市議会における「公立幼稚園の役目は終わった」とする廃止検討案を受け、地元商店街を中心に「東二番丁幼稚園の存続を

願う会」が設立されたという。仙台市と会が話し合いを重ねる中で、民間幼稚園として存続する方向で要望が出されたという。そこでは、

①教育課程等

「一三〇年の伝統・歴史を守り、これからも仙台市のモデル園としての役割を果たし（中略）教育方針・保育方針を継続すること。校庭、体育館、プール等の小学校施設が継続して使用できるようにすること」

②教員体制等

「教職員の質を確保すること」

③保育料

④その他

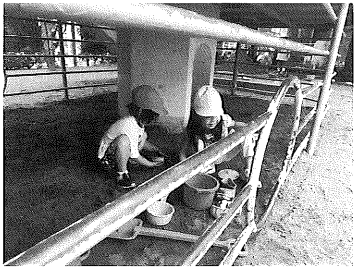
「園舎、園庭貸付や契約条件等について十分に配慮する」

等、妥協のない条件が示されている。この「存続を願う会」が民間の受け入れ先探しも担ったという。「園の名前は一三四年の間に十二回も変わってきた」という園長先生のお話を伺うにつけ、伝統と歴史は地域の厚い支えがあってこそつながってきたのだと胸が熱くなる。

しばらくすると、隣の保育室が静かになる。「園庭で遊ぶ子が多くなったんだと思います」という加藤園長の言葉を機に、遊んでいる子どもたちの様子を見せていただくことにする。

異年齢の子どもがかかわる

園庭は小学校校庭との共有になっていて、一角に、船をかたどったオリジナル遊具（昭和六十三年の幼小増改築記念）が設置されている。帆には、「東二丸　幼・小」と書かれている。校庭と地続きの一階と、はしごで登る二階部分がある。隠れ家のような空間は、大人



の目にも魅力的に映る。

一階部分の丸い出入り口から四歳児Aが三歳児Bに声を掛ける。「ねえ、Bちゃんて泣くことある？」。B児は遊び続けながら、「うん、あるよ。ぶつけた時。あと、お母さんに怒られた時」と意外に的確な答えを返す。「Bちゃんは、何歳？」「三歳」。そんな会話の後、A児はすっと中に入り、一緒に遊び始めた。かかわり始める前の手続き、やりとりがなかなかしっかりしていて、それでいてほほ笑ましい。

保育室への出入り口付近では、四歳児が、たらいや水槽を囲んでザリガニと触れ合っている。小学校のチャイムが鳴り、休み時間になった高学年の女子が数名近づいてくる。立ったまま手を後ろに組んだ姿勢で、園児がザリガニをつかもうとする様子を見下ろしている。園児がザリガニを手にすると、「持てるんだ！　すごいよねえ」と称賛の言葉を掛ける。冷めた感じで見ているのかと思いきや、素直な小学生の言葉に心が温かくなる。

こうした学年、学校種を超えた異年齢のかかわりが日常的に繰り広げられていることが、短時間の参観でも十分に伝わってきた。公立小学校と民間幼稚園になった今も、幼小の関係が変わらず続いている。

七夕飾り

「幼稚園の子どもたちが作った七夕飾りが、駅前に飾られているんです。ぜひ見て帰ってください」と齋藤先生。保育室内の壁面にも短冊飾りが飾られていた。「サッカー選手になりたい」や「野球選手になりたい」という文字が目に飛び込んでくる。地元

チームである楽天イーグルスの最近の活躍ぶりが思い起こされた。子どもたちの夢とあこがれも膨らむはずだ。「モデルになりたい」という短冊もあり、「やはり都会の幼稚園だわ」と思う。

ホールの片隅には段ボール箱が積まれていた。箱の中には丁寧に手作りされた折り鶴や巾着等の七夕飾り、飾りの材料になる裁断した千代紙などがきれいに収められていた。これだけの量を作るにはどれほどの手間と時間がかかっていることかと思う。「地域の方たちが作ってくださったものなんですよ」という齋藤先生の言葉に、地域と幼稚園のつながりの深さを改めて実感させられた。

自然を大切に

「都心にあるという立地条件で、自然に触れることが難しいので、限られたスペースを生かして、いろいろな体験ができるように努力している」と齋藤先生が話された。園庭と校庭の境界にある花壇には、芝生を植えてみたこともあるが、現在はハーブを植えたりジャガイモを栽培したりする場所に変えられたという。この日も、園長先生が収穫したてのキュウリを塩もみにして、お弁当の時間に、子どもたちに振る舞われていた。子どもたちは「園長先生は、お料理が上手なの！」と誇らしげに私たちに話してくれた。午後の時間に、「園長先生！ キュウリ、とってもおいしかった！」と声を掛ける子どもがいて、育てたものを食する喜びをしっかりと味わっていることが伝わってきた。

オアシス

子どもたちが来訪者に向けるまなざしがとても温かく、私たちの心に残った。自分の名前を自己紹介してくれたかと思うと、隣の友達を「この子は○○ちゃんです」と紹介してくれたりもする。

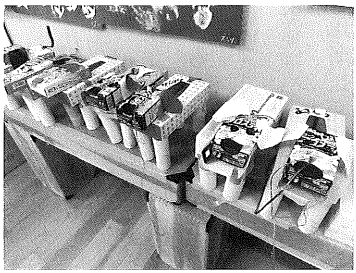
昼食を保育室で子どもたちと共に頂けることになった。子どもたちはうれしそうに準備の進め方を知らせ、自分のことを話す。さらに「○○ちゃんはもうすぐ引っ越しちゃうの」と、友達にかかわるニュースも伝えてくれた。

廊下の壁に「オアシス」の掲示が張られていた。「おはようございます」「ありがとうございます」「しつれいします」「すみません」の四つの頭文字をつなげてオアシスと書かれている。

五歳児の保育室で、ピザを作る子どもたち。薄茶色の紙で作ったピザが本物らしくできている。ピザ屋さんの看板を書いていたD児が「○○と○○は書けないから」と担任を呼ぶ。そこにE児が「うち、書けるよ」と自然に助け船を出す。

困った時、できないことがあると教師を呼ぶ。安心して頼りにする関係が基盤としてあることが伝わってきた。さらに、教師はすぐに助けてしまわずに、子ども同士のかかわりにつなげるような、ちょうどよい間をとっておられて、感心させられた。

三歳児の保育室には、空き箱で作った犬がたくさん並んでいた。五歳児が近隣のお散歩でペットショップに行ったことがきっかけで始まった犬のお散歩遊びが、三歳児に伝わって大人気になったそうだ。三歳児の靴箱に張ってある「チューリップメール」に「空き箱わんちゃん、毎日持ち運び大変だと思います。一つ



のものに愛着をもって大切にする心を育てるためにご協力ください」と書かれていた。箱で作った犬を家庭に持ち帰って遊び、また幼稚園に持ってきて遊び続ける中で育つこと、保育の中で、今、大切にしたいことを、保護者にも丁寧に伝える。幼稚園が、子どもたち、保護者、教師の間で共有したい思いが、これらの掲示から私たちにもしっかりと伝わってきた。

歴史をつなげ、子どもたちの今を大切に

仙台市立東二番丁幼稚園の創立一三〇周年記念誌「あゆみ」に、齋藤先生がお茶の水女子大学を視察し、恩物机と共に写った写真が載っている。この「恩物机」は東二番丁幼稚園で創設当時から使われていた物で、昭和初年にお茶の水女子大学に譲渡され、昭和二〇年の仙台空襲による消失を免れ、今に至っている。歴史がつながる縁をここでも改めて感じさせられた。

幼稚園要覧に「今日が楽しく明日が待ちどおしい東二幼」と書かれている。「私たちの保育は特別なことをするのではなく、あたりまえのことをし続けることを大切にしている」と園長先生は話された。「あたりまえ」の中に込められた思いを、私たちも共に大切にしていきたいと思いつつ、駅前の七夕飾りを見て帰途についた。

訪問者／上坂元絵里・灰谷知子・吉岡晶子
文／上坂元絵里（本誌編集委員）

参考文献
仙台市立東二番丁幼稚園創立一三〇周年記念誌「あゆみ」二〇〇九年

— 訪問メモ —

訪問時期：2013年7月
訪問場所：学校法人曽根学園
東二番丁幼稚園
〔住所〕仙台市青葉区一番町2-1-4
〔電話〕022-222-2337